

D. ハルバースタムの現代史認識

～アメリカの朝鮮戦争～

李 景 珉

朝鮮戦争は、第二次世界大戦後の世界の民族解放運動の中で生じた要因の重層する戦争であった。南北朝鮮の民族同士の争いが、冷戦状況の中で瞬く間に米ソ中が咆哮する事態を招いてしまったのである。

アメリカは世界を自国の価値判断で捉えていたわけで、植民地支配を体験し新たな社会の構築に臨んでいた朝鮮民族のナショナリズムに対して配慮することなどなかった。国連を利用して直ちに軍事介入を果たし、3年間も世界を狂気の戦争に追い込んだことになる。それは、朝鮮民族にとっては夢にも予期せぬ展開であった。

ところで、アメリカの優れたジャーナリストであるデイヴィッド・ハルバースタム (David Halberstam) が、これまでのベトナム戦争の研究から得た体験をもとに、朝鮮戦争を新たな視角で分析している^{*1}。朝鮮戦争は第二次世界大戦とベトナム戦争の間に位置し、テレビ・メディア時代以前の戦争であっただけに、ほとんどのアメリカ人にとっては忘れられた戦争に他ならない。約3万7千人の米兵が死亡したにもかかわらず、戦争の背景や経緯、アメリカがどんな役割を演じたのかを知っている人はまれであろう。当然のことながら、朝鮮戦争はアメリカ国民を一致団結させたこともなかったし、またベトナム戦争のように国民を二分して悩ませた戦争でもなかった。緒戦では米軍は大敗を喫したものの、次第に熾烈な戦闘に順応していき、不毛な対決の末に勝ちも負けもない休戦で終わった。ベトナム戦争とは対照的に、朝鮮戦争についてアメリカ人の大半の関心は著しく低い。

しかし、ハルバースタムは、イギリスの歴史家であるカー (E. H. Carr) のごとく、歴史の連続性に着目し、現在の意味を過去との関係を通じて明らかに

*1 David Halberstam, *The Coldest Winter: America and the Korean War*, Hyperion, New York, 2007. 日本語訳は山田耕介・山田侑平訳『ザ・コールドテスト・ウインター』上、下、文藝春秋、2009年。

すべく朝鮮戦争の究明に取り組んだのである。そのために、朝鮮戦争を体験した米国人の老兵、復員軍人の生存者など数百人を探し出して、渾身の力をふりしぼり足を運んだ。そして、厳寒の戦場で戦うことになった末端の兵士ひとりひとりとインタビューを行い、当事者の生々しい姿を浮き彫りにしている。彼の大作『The Coldest Winter』は、アメリカ人を対象に執筆したというより、全世界に対して、アメリカがいかに世界各地の紛争に介入してきたか、すなわち「アメリカの戦争」の内幕を暴いている。

本稿は、彼の著書を中心に「アメリカの朝鮮戦争」の意味を考察する。朝鮮半島の動向が依然として注目されている今日、彼が明らかにしている朝鮮戦争の実態が示唆するものは多い。

1. 人物・デイヴィッド・ハルバースタム

D. ハルバースタムは1934年にニューヨークで生まれた。両親はそれぞれ医師と教師を務めていた。ハーバード大学に進みジャーナリズムを専攻するが、在学中に学内新聞の編集に携わる。1955年に大学を卒業し、ミシシッピ州ウエストポストの地方紙で記者として働いた。それは彼の希望であり、当時、彼は高まっていた公民権運動の取材に没頭していたという。上司からは、「リベラル」すぎるのではないかと指摘されることもあったようだ。その後1960年にニューヨーク・タイムズの記者となり、1962～1963年にはベトナムに赴き、ベトナム戦争の取材をおこなった。

ハルバースタムは、アメリカ政府の公式発表とは異なり、アメリカが支持する南ベトナム政府がいかに腐敗しているかを報じた。アメリカのベトナムへの深入りに批判的であったがために、アメリカ軍首脳や政府機関の怒りをかうこともあったが、彼のレポートは紛れもない事実であった。ケネディ政権にとっては彼は監視対象の記者であったが、彼のベトナム報道は1964年にピューリッツァー賞を受賞している。

彼は1967年にニューヨーク・タイムズを辞任し、以後著作活動に専念するようになる。ハルバースタムの名声を不動のものにしたのは、ケネディ、ジョンソン両政権の混沌とした政治状況がベトナムへの軍事介入を導いた過程を描いた『ベスト・アンド・ブライテスト』（1972年）であった。アメリカ政府内部の人間模様を鮮やかに描いているところは彼の著作の真骨頂であり、それはそ

の後の彼の著作においても見る事ができる。

その後ハルバースタムは、変わりゆくメディアの世界と政治への影響を書いた『メディアの権力』(1979年)、米国経済の変化と政治への影響を取り上げた『覇者の驕り』(1986年)などを著し、いずれも出版界の注目を浴びている。彼の著書の多くが日本語に翻訳されている。

彼は、2007年4月23日、カリフォルニア州メンローパークで自動車事故により死去した。73歳だった。ここに取り上げる著書『The Coldest Winter』を完成した直後だったが、死の直前まで、次の仕事への取材を精力的に続けていたという。

ハルバースタムが朝鮮戦争について関心を持ったのは、彼が1963年にベトナムに記者として従軍していたとき、ある米軍中佐と交わした会話が契機となったという。朝鮮戦争を体験した米軍士官が今度はベトナムで米軍軍事顧問として戦場にいたのであった。理不尽な朝鮮戦争にアメリカは介入し、17歳、18歳のアメリカの若者までが含まれた部隊を牽き連れて、凍てつく寒さの中で中国軍の大規模な攻撃を受けるという試練に見舞われた想像を絶する話を聞かされたのである。その士官とは懇意な間柄となり、アメリカが戦争を楽観視していた実状や情報操作、戦闘の実態を士官から教えられた。そして、いつか機会があれば朝鮮戦争について既存の参考文献を読み、インタビューをすることによって、そこで起きたことについて感触をつかもうと決心したのであった。^{*2}朝鮮戦争で生き残った老兵たちにインタビューしながら、彼は多くを学んだという。徹底したインタビューを重ねていく彼は、アメリカが朝鮮戦争の膠着状態からベトナムでの大失敗に突き進んだ真相、アメリカ人が忘れようとした戦争の実態、当時の異常な政治的苦痛の時代の理解に乗り出したことになる。まさに『The Coldest Winter』は、彼の50年間のジャーナリストとしての経験から生まれた著作である。

老兵たちに会いに行くときの躊躇する心の内をさらけだすなど、ハルバースタムは実に人間的な側面をも持っている。

*2 『ザ・コールドスト・ウインター』下、470頁。

2. ワシントンと北京の対応

戦争の勃発

1950年6月25日早朝、北朝鮮軍の精鋭およそ7個師団が38度線を突破した。兵士の中には中国の国共内戦で共産軍側について戦った者たちも含まれており、3週間で南全土を制圧する目論見だった。

北朝鮮軍侵攻の報がワシントンに届いたとき、ワシントンの政府首脳は「ソ連は北朝鮮の越境を後押しした、いやおそらく命じた」と受け止めた。しかし、それは事実ではなかった。後に明らかになるのであるが、「侵攻の推進力は自信過剰の若造の金日成で、用心深いスターリンは幾らかしぶしぶ同調した」ことがモスクワの公文書館資料の公開で明るみに出た。首相金日成は、副首相・外相である朴憲永とともに二度もモスクワ詣をして、スターリンに戦闘開始の支持を訴えている。当時のアメリカ政府のソ連専門家は、北朝鮮を何でもクレムリンのいいなりになるソ連の衛星国にすぎないと考えていた。

トルーマンが重視したのは朝鮮というより、アメリカが共産主義の挑発にどう対応するかということであった。トルーマンは、ベルリン、インドシナ、ユーゴスラビア、そしてとりわけイランでの危機発生を懸念していた。ささいな事件を起こし、ソ連はそれを介入の口実にするだろうと公言していた。

北朝鮮の侵犯が発生したとき、ただちに問われたのはアメリカの威信であった。翌日、東京からの電報は、韓国軍が持ちこたえられないならアメリカは介入するべきだとの進言で、「韓国がいわれのない攻撃に蹂躪されるのを坐視すれば、破滅的な事件の連鎖を引き起こし、世界戦争に道を開く可能性が極めて高い」と数日前に38度線を視察したばかりのダレス（John Foster Dulles）が送付したものであった。

トルーマンは軍首脳および補佐官らとの会議で、アメリカ人家族保護のために在韓米空海兵力を投入することを決定した。そして、さらに北朝鮮軍が南進を加速させ韓国軍が総崩れになるその5日後の、6月30日には、アメリカ地上軍の派遣を決定して米軍が本格的に介入するところまでエスカレートしていった。トルーマンは議会の決議をえずに、こうした決定を行ったが、アメリカ議

*3 『ザ・コールドスト・ウインター』上、129頁。

会が問題視することはなかった。

それと同時に、アメリカは6月25日国連の事務総長に対して、北朝鮮軍がこの日早朝に数箇所において韓国領土に侵略したことを通報し、安全保障理事会の即時開催を要請した。アメリカはこうした朝鮮問題を安全保障理事会に持ち込んだのであるが、ソ連は愚かにも理事会をボイコットしていた。その理由は皮肉なことに中国国民党政府が同理事会に居座っていることへの抗議だった。ソ連の拒否権が消えたことにより、米国は6月25日および6月27日、希望した決議を手に入れ、最終的には米軍主導の軍隊に国連旗が与えられ、その旗の下で戦うことになったのである。^{*4}安全保障理事会の6月27日決議は、国連加盟国が韓国に対して、武力攻撃を撃退しかつこの地域における平和及び安全を回復するために必要な援助を供与すべきことを勧告している。

アメリカはなぜかくも敏捷に行動し、軍事的に介入したのだろうか。いくつかの理由が考えられるが、まずは米国が「大韓民国」の生みの親であったことであろう。アメリカは朝鮮の分断にかかわり、その後3年間の米軍による占領統治期間を経て、国連が主導した総選挙を実施して韓国を独立させ、政府を誕生させたという経緯がある。韓国の危機的な状況を前にして、アメリカは逃げるわけにはいかなかったのであろう。

そして、もう一つは中国の共産化を阻止できなかった「失敗」を繰り返さないために、アメリカは即刻介入・参戦を決定したのではないだろうか。さらにアメリカの国内情勢すなわち国内にマッカーシー旋風が吹き荒れていた状況を見無視することが出来なかったのかも知れない。共和党は朝鮮戦争の開戦を大統領と國務長官攻撃の材料と見立て、すでに俎上に載せている中国の喪失と結びつけようとしていた。^{*5}したがって、トルーマン政権には、共産主義の侵略に対して確固たる姿勢を誇示することが求められていたのである。

緒戦の敗北

しかし、アメリカはまったく準備不足のまま参戦することとなった。最初に戦闘に投入された在日米軍の装備は劣悪なもので、訓練もまともに受けたことのない部隊であった。米軍部隊は装備は貧弱、隊員の体格も悪く、指揮もひど

*4 同上、146頁。

*5 同上、140頁。

いことが多かった。しかし、アメリカ人は米軍兵士の能力を不用意に過大評価していた。最初に韓国に派遣された兵士は「精神、心理、士気、肉体の面で戦う準備ができていなかった」のである。まさに米軍は、自分たちには理解出来ない戦争を戦う兵士たちで構成されていたのである。

韓国軍は兵力約10万、武器・装備はほとんどが撤退した米軍から譲り受けたものであった。これに対して、北朝鮮軍は兵力約20万、武器・装備はソ連から導入した新型装備を確保していた。戦闘機といえば韓国が連絡用と訓練用の航空機22機に対して、北朝鮮は戦闘機だけでも211機を保有していた^{*7}。

韓国軍はほとんどの前線ではほぼ壊滅的な打撃を被った。派遣されてきた米軍部隊もさんざんな体たらくだった。アメリカは北朝鮮軍の侵略を終わらせるのに大して手間は取るまいと予想していたが、北朝鮮軍は圧倒的な強さで南を席卷し、韓国軍と米軍は太刀打ちできなかった。

北朝鮮の軍隊は精鋭で武器も米軍より優れていた。北朝鮮兵は抑圧され植民地化された社会から、粗雑ではあるがソ連型モデルによって即席の近代をなそうという意欲に満ち、頑強で、怒りに燃え、戦いに鍛えられた精鋭だった。余分な武器は持たず、アメリカ兵よりも引き締まった体をし、戦地の気候・風土への順応能力も高かったのである。農民出身の兵士たちは、日本による朝鮮植民地化を憎み、アメリカ人とソウルの手先どもは過去の代理人であり、未来をもたらす者でないと信じていた。アメリカ人はいまや日本人すなわち旧朝鮮の支配階級の同盟者である。したがって、この戦争はかつて自分たちが祖国を離れることを余儀なくされた闘争の続きなのだ。彼らの心のなかでは、韓国軍指導部はかつて日本人の側に立って戦った朝鮮人と映った。上層部にはとくにそれが言えた。北朝鮮兵はきびしく鍛えられ、軍紀は厳正で士気は盛んだった^{*8}。

38度線を突破した北朝鮮軍は、3日後には南の首都ソウルを占領し、さらに南へと軍を進めていった。北朝鮮軍の怒濤の攻撃は韓国軍が防御態勢を整える時間を与えず、さらには戦場に投入された米軍部隊をも撃破して、南下を続けた。兵力、武力ともに劣る米軍部隊は時折奮戦したが、基本的には北朝鮮軍の兵力の規模と装備に圧倒された。アメリカを始めとする16カ国の軍隊が国連軍

*6 同上、203頁。

*7 徐相文（音訳）編著『6・25戦争史』第1巻、国防部軍史編纂研究所、ソウル、2005年、129-132。

*8 『ザ・コールデスト・ウインター』上、207-208頁。

として派遣され韓国の防衛に努めたのであったが、北朝鮮軍に対抗できなかった。総力を挙げ釜山へ向けて進撃し続ける北朝鮮軍は、8月1日には洛東江近くまでたどり着いたのである。韓国軍と米軍（国連軍）は朝鮮半島の一隅に追いつめられたのだった。

双方に勝利への圧力が高まっていった。米軍は縮小する戦場に新戦力を急行させ、一方北朝鮮軍は金日成がスターリンに約束した3週間での釜山陥落は不可能であることがわかり、米軍の兵力増強が十分となる前に最終的な勝利を得ようと焦っていた。米軍の参戦は金日成を驚かせたものの、彼は北朝鮮軍を過大評価し、「8月は勝利の月である」と楽観していた。^{*9}

しかし、戦闘をじっと見つめていた人民中国の懸念は大きく、毛沢東の目には北朝鮮軍の南進は結局は失敗に終わり、戦闘の潮目は変わろうとしていると映った。毛沢東はこういうことにかけてははるかに場数を踏んでおり、金日成の作戦を最初から危ういと思っていたのである。これまで戦争を武器の面においても戦力の面においても劣勢で勝ち抜いてきた経験を持つ毛沢東は、朝鮮戦争の展開を絶えず注視していた。毛沢東は米軍の仁川上陸作戦の可能性を早くも予想していたのだった。^{*10}そして、そのことを金日成に忠告したのだが、彼がそれに関心を示すことはなかった。金日成はこの忠告を無視し続けたことで深刻な事態を招くことになったのである。

仁川上陸作戦

前線に転機が訪れたのは、9月中旬に国連軍がソウル近郊の仁川上陸作戦に成功してからであった。マッカーサー国連軍司令官の指揮によってこの作戦は密かに研究され、9月15日に敢行された。北朝鮮軍は不意をつかれたことになる。

仁川上陸作戦には、アメリカ海軍をはじめ、イギリス、フランス、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド、オランダなどの艦船を含む総計260余隻の艦船と韓国の哨戒船4隻と掃海艇7隻が参加した。^{*11}戦闘部隊の1万3千人の兵士が海岸の堤防と埠頭に殺到して攻撃が開始されたが、犠牲者は比較的軽く、作戦自体はスムーズに進行された。^{*12}北朝鮮軍の主力部隊は、前述のように洛東

*9 同上、242頁。

*10 同上、436-438頁。

*11 歴史群像シリーズ61、『朝鮮戦争』上、学研、1999年、128頁。

*12 『ザ・コールドスト・ウインター』上、439頁。

江周辺に終結し、釜山周辺を攻撃していたので、仁川地域には守備隊の兵力が残るのみで、国連軍との対決も散発的なものであった。しかし、周辺の北朝鮮軍が戦闘態勢を整えてからは本格的な対決が展開された。アメリカの海兵隊の先頭部隊がソウル郊外にたどり着いたのは9月25日、以降3日間、ソウル占領を巡る凄まじい戦闘が繰り広げられた。ソウル占領についてあるイギリス人記者は次のように報じている。

「騒音と破壊のぞっとする焦熱地獄だった。前方を爆撃する急降下爆撃機の耳をつんざく金属音、戦車砲の青白い閃光、炎上する木造家屋のはげしくはじける音、電話柱や高圧鉄塔が崩れ落ちて電線は一面にめちゃくちゃにもつれ…これほど恐ろしい解放を味わった人びとはほとんどいない」^{*13}

前線は東西南北に拡がった。南に深く浸透した北朝鮮軍は北へと退き始めた。それを追って北上する国連軍の先頭部隊は38度線に近づいた。10月1日、韓国軍がついに38度線を越えて北へと進撃しはじめた。

ところで、朝鮮戦争の勃発直後の6月25日に国連の安全保障理事会が採択した最初の決議は、北朝鮮軍の侵入は平和の破壊であるとして、敵対行為の即時停止と北朝鮮当局に対してその武装軍隊を38度線まで撤退させることであった。しかし、今や侵略を受けた南の方が北朝鮮「領内」に進軍する事態が展開となったのである。

朝鮮戦争が始まってから3ヶ月が経過したこの時点で、38度線の突破は軍事的には避けられないものであった。韓国軍および米軍の北朝鮮への進軍を止めることができるものは何もなかった。

それはアメリカ国務省では、ケナンのような平和主義者が退場してしまっていた。マッカーサーに限らず、ラスク、ダレスなどの強硬派が勢力を伸ばしていた。

アメリカはこうした状況を、北朝鮮侵攻の道が突如開くとはまったく予想していなかった。仁川上陸作戦もある面では極めて危険な攻撃作戦であり、それが提案されたとき、反対の意見も続出していた。しかし、渋々に認めたマッカーサーの強引なイニシアチブが結果的には大成功となって皆が勢い付いていたのである。アメリカの指揮官たちの眼には、勝利は確実なものと映った。眼前のこの流れを止めようとする考えは、ワシントンの平和主義者の中にはあったも

*13 同上、446頁。

の、政権の中で発言権を保持している者の中からはでてこなかった。現場の米軍指揮官らは挙って北進を望んでいたし、韓国軍の司令官や韓国政府の最高指導者・李承晩大統領は「北進統一」「滅共統一」を久しく以前から叫んでいた。38度線は朝鮮民族にしてみれば「国境線」ではなく、極めて恣意的、人為的な一時の「国境」に過ぎなかった。それは、北側も南側も一致する考えであった。

問題は、中国の対応であった。毛沢東政権がどう出るかである。人民中国が誕生してからちょうど一年、未だに国内が安定したとはいえない状況にあって、中国は外部からの侵略に神経をとがらせていたからである。朝鮮戦争が勃発した直後、台湾に逃れていた蒋介石政府はいち早く韓国への台湾軍の派遣を提案してきた。まさに中国大陸への復帰の機会を狙っての提案であり、それをマッカーサーは強力に支持した。トルーマン政権の閣僚の中にも、國務省の内部にも、台湾軍を受け入れるべきと主張する声があったほどである。しかし、朝鮮戦争の拡大を望まなかったアチソン國務長官の意見でそれは辛うじて抑えられていたのである。

すでに中国は、開戦直前の6月28日に、トルーマン大統領が米国の空海軍部隊にたいして韓国政府軍に擁護と支持を与えるよう命令した6月27日の声明を受けて、「大統領の声明は中国領土に対する武力侵略であり、国連憲章を根本的に破壊するものである…台湾・朝鮮・ベトナムを侵略するための口実をつくりあげることであり、アジア問題に干渉する一步進んだ行動」であると糾弾していた。ソ連の新聞『プラウダ』も6月28日、米国は直接侵略行為に転じたと次のように報じていた。

「トルーマン大統領は朝鮮人民の裏切り者である李承晩の軍隊に軍事的援助を与えるため、米国の空軍および海軍にたいして指令を発した。同時に米国は“台湾に戦火が波及するのを阻止するため”第7艦隊に指令を発しているが、これは、米軍が中国の領土の一部に対して事実上の占領を行うことを命令したものである」という内容であった。

3ヶ月前の声明の内容がそのとおりの現実になるのに時間はかからなかった。10月2日、中国の周恩来首相は北京駐在のインド大使のパニッカー(K. M. Panikkar)に、国連軍が38度線を越えたならば、中国は北朝鮮を守るため派兵するだろうと語った。パニッカーはその10日前、中国人民解放軍の総参謀長代理から、中国はアメリカが自国国境に来るのを座視しない、と告げられた。中国の指導者がパニッカーに伝えた内容はすべて直ちにニューデリの上司に送

られ、それは外交筋を通して、英国および米務省の高官らにも伝えられた。しかし、アメリカは「信号が送られたものの、受け取らなかった」のだった。^{*14}

そしてアメリカ政府首脳が国連軍の北進に関して明確な姿勢を打ち出さずにいる内に、国連軍司令官のマッカーサーはアメリカ軍統合参謀本部に北進の計画書を提出し、それは9月28日トルーマン大統領の承認をえることになる。そして10月2日、マッカーサーによってそれは国連軍の戦闘部隊に「作戦命令第2号」として下達されたのである。^{*15}

国連でも北進については賛否両論が交錯したが、すでにアメリカによって根回しされ、国連総会は10月7日に「全朝鮮にわたって安定した状態を確保する」ため国連軍の北進を追認する決議案を採択したのである。これまで国連安保理事會を欠席していたソ連が8月から安保理事會に復帰したために、アメリカはソ連の拒否権行使のない総会にこの問題を上程し、承認を図ったのである。

すでに米軍、韓国軍は38度線を越えて北朝鮮軍を追撃していたが、こうした国連の決議は国連軍の北進を後押しした。国連軍として朝鮮戦争に派遣された各国の地上軍の正確な人数は把握し難い。しかし、韓国国防部の資料によれば、米軍が約30万人、英国1万4千人、カナダ6千人、トルコ5千人、オーストラリア2千、フランス、エチオピア、ギリシア、フィリピン、ニュージーランド、タイ、コロンビア、ベルギーがそれぞれ千人程度であった。^{*16}

こうしてアメリカの朝鮮戦争は当初の目的を大いに拡大したことになる。北朝鮮軍が敗退を重ねて後退していく中、国連軍は10月19日には平壤を占領する。その一週間後、李承晩大統領夫妻が平壤入りし市民大会が開催される。李承晩は、平壤市民らの大歓声のなか、武力統一を訴えたのである。国連軍の北進の勢いはとまることはなく、中国国境にまで迫っていった10月25日、マッカーサーは国連軍の北進限界線を撤廃して北朝鮮軍への総追撃を指令し、戦争の勝利を確信したかにみえた。

中国の参戦

話は戻るが、アメリカは朝鮮戦争が勃発する直前まで、戦争が起きることは予想していなかった。米中央情報局（CIA）は、北朝鮮が軍備を整えるに余念

*14 同上、475-477頁。

*15 金幸福『6・25戦争史』第2巻、国防部軍史編纂研究所、ソウル、2005年、95頁。

*16 <http://www.koreanwar60.go.kr/20/2002000000.asp>

がなかったのを察知していながら、北朝鮮の侵攻はないと高をくくっていた。

米情報局の判断ミスは、朝鮮戦争の開始後に再び起きた。ソウルを奪還した国連軍は38度線を突破し北上、分断線が消滅した。国連軍が平壤を占領すると、中国軍が北朝鮮に雪崩込んできた。しかし、アメリカ情報当局は「中国の脅しは本気ではない」、中国の介入はないと油断していた。アチソン國務長官もパニッカー北京駐在インド大使からの情報を真剣に受け止めなかった。

朝鮮と中国は鴨緑江を挟んで国境を接しているが、その地理的關係を象徴的に表すコトバに「唇齒」の關係というのがある。中国東北部、旧満州には、多くの朝鮮民族がその昔から、とくに植民地時代に移住して暮らしていた。中朝両民族はともに帝国日本と闘った。1930年代、金日成は旧満州で「東北抗日連軍」という中朝連合の遊撃隊の一員として闘争していた。だが、1940年秋に日本軍の執拗な追撃に息を切らし、彼が率いる部隊はソ連領内に避難して、結局そこで第二次大戦の終結を迎えた。その間、彼は対日参戦を控えていたソ連軍の保護の下でハバロフスク近郊の野営地で中国人らと共に軍事訓練に励んでいたのである。

朝鮮の革命家たちのなかには、大戦後北朝鮮に帰国し要職に就いたものも多い。また中国に留まり、国共内戦に積極的に参加するものも多かった。朝鮮戦争はその延長線上にあり、中国の参戦は必然的な結果であった。米国は、歴史的に形成されたこうした中朝關係を理解していなかったのではないだろうか。

中国の参戦は毛沢東の熟慮の結果であった。国連軍の仁川上陸作戦後、北朝鮮軍の北への退却を注視した中国は介入の方向に進み始めた。中国の参戦は兄弟国である北朝鮮への連帯の現れではあると同時に、まずは中国自身の問題として位置づけたのだ。毛沢東は、それが新中国にとって、国内的にも国際的にも、そして革命の将来にとって必要なことだと判断したからである。彼は、^{*17}アメリカの戦争は正義にもとるものであり、部隊の士気と戦場での戦果にもそれは影響するはずだ。世界からも孤立しており、世界の世論に対してもきわめて弱い立場にあると捉えた。

毛沢東はもし朝鮮で米軍に勝てば、長い困難な内戦を経た中国は政治的支配力を大きく強化することができ、同時に、中国人民を共産党周囲に団結させ、政治意識を高めることができる。中国人民に中国が世界舞台における新しい革

*17 『ザ・コールドスト・ウインター』上、480頁。

命勢力であることを示すことにもなると判断し、決断を下したのである。この決断は、金日成からの要請を受ける前にすでに決めていたことであり、またスターリンの考えがどうあってもそれに影響を受けるものではなかった。

毛沢東は8月末の時点で中国の参戦が支払うべき代価を試算させていた。アメリカとの戦争で最初の一年で死者6万人前後、負傷者14万人とのことだったが、とにかく参戦は不可避だと結論づけた。^{*18}

おわりに

マッカーサーは中国との全面戦争を主張してワシントンを震えあがらせたのであった。朝鮮での膠着状態は敗北であり、中国への戦争の拡大だけが真の勝利をもたらす、ということだった。彼は、「われわれの戦いの目標は一朝鮮に留まらない。自由アジアの実現だ」と述べ、中国軍の膨大な規模からすれば、アメリカは大規模な兵力増強か核兵器の使用抜きでは朝鮮半島に留まることはできない、と不吉な主張をし続けた。^{*19}しかし、前線が膠着する中で、マッカーサーの過激な発言は一部の人びとに支持され、また憤り欲求不満になっていた層には大いに受け入れられた。

マッカーサーの振る舞いはトルーマン政権にとって座視できるものではなかった。トルーマンは、軍首脳らとも会談してマッカーサーの解任を決定し、1951年4月11日それを公表した。マッカーサーの後任にはリッジウェイ将軍 (General Matthew B. Ridgway) が任命された。

その後、戦闘は消耗戦になった。ワシントンと朝鮮現地の司令部が「限定戦争」であるとの視点を共有し始めた。残酷で犠牲の多い戦闘、突破作戦はほとんどなく、基本的に戦線を変更せずに相手に最大限の損傷を加えようとする戦略になった。前線の指揮官には大規模な攻撃は許されず、死傷者を最小限に抑えるよう命じられた。ワシントンがこの時点で戦争の拡大ではなく縮小を望んでいたことを物語っている。

双方とも相手の兵力をなんとか弱体化したとはいえ、どちらも戦争そのものに決着をつけるだけの力はなかった。中国は約30万の兵力を前線に投入し、驚

* 18 同上、481頁。

* 19 『ザ・コールドスト・ウインター』下、372頁。

くべき数の死傷者を出した。米軍の空軍力と火力の優位の下での中国部隊の規律と粘り強さには、米軍の前線指揮官も瞠目した。例えば兵站の面において中国軍は十分な補給を確保していなかった中で、兵站支援の大半をトラックではなく、人の足によって行っていた。

朝鮮に平和をもたらすにはアメリカの政権交代を待たなければならなかった。トルーマンの民主党政権から、アイゼンハワー（Dwight David Eisenhower、1890-1969年）の共和党政権に替わったのは1953年1月で、共和党は、実に20余年ぶりに、大統領選に勝利を収めた。アイゼンハワーは「朝鮮戦争を終わらせる」と宣言し、民主党候補に660万票の差を付けて圧勝した。第二次世界大戦中のヨーロッパの連合軍最高司令官を務めたアイゼンハワーは、思慮深く、慎重、そして経験豊かであった。軍人のなかでは好戦的な愛国主義からはもっとも遠い存在であった。^{*20} 緊迫する危機の時代にあって、穏和で人をなごませる人物であった。

そして、もう一人の役者であったスターリンの死は共産側の対応に変化をもたらすこととなった。毛沢東がスターリンの眼を気にする必要もなくなり、休戦の条件が整い始めたのである。しかし、北の金日成とは異なり、南の李承晩は多大な流血と犠牲の挙げ句の果てに、またこれまでと同様に国の半分しか支配できないという事実には不満で、休戦会談への動きを壊そうとした。しかし、彼はもはや戦争の主役ではなく、どうすることもできなかった。

朝鮮戦争の終結の条件に満足したものはひとりもいなかった。

* 20 同上、422頁。